2015.6.19

博物館 Dictionary No.181

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

室町時代の武士のすがたを見てみよう。

室町時代の金工Ⅰ
戦う男のダンディズム

室町時代の文化

「室町時代」と聞いてみなさんはどんなイメージを持たれるでしょうか？

室町時代後期のいわゆる戦国時代を別とすれば、おそらく多くの人は室町時代に対してなんだかパッとしないモヤモヤした印象を抱いていると思います。我々が歴史上の出来事に触れる機会の一つとして、時代劇や時代小説がありますが、これらの中で扱われる時代も戦国時代や江戸時代が圧倒的に多く、室町時代を舞台とすることはあまりありません。NHKの大河ドラマでも、室町時代が舞台となったのはたった２作品だけなのです。ではこの不人気な室町時代、美術や芸能をはじめとする文化の面でも他の時代と比べて劣っていたのでしょうか？

いいえ、そんなことはありません。それどころか、平安時代に京都で生まれた公家の文化と鎌倉時代に東国で生まれた武家の文化を融合させ、そこに大陸から伝わった最先端の外来文化を取り込んだ室町文化は、今日まで続く日本文化の根幹を形作ったと言ってもいいのです。上流階級が好んだ文化だけではなく、地方の村落や都市の民衆が担った庶民文化とも融合し、能・狂言・茶の湯・生け花など多くの特色ある文化を生み出したのが室町時代の大きな特色といえるでしょう。

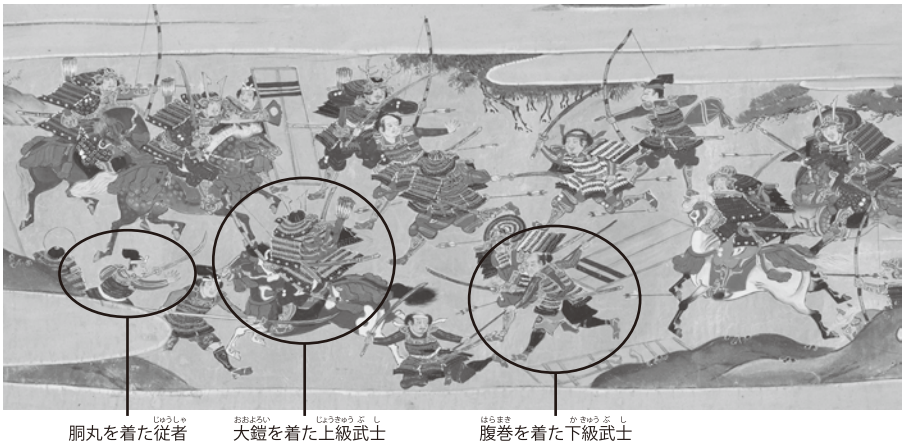
写真1 【重要文化財】《縹糸威胴丸 兜・大袖付》 京都国立博物館蔵

武士の装い

さて、鎌倉時代から引き続き、室町時代の文化の中心となったのもやはり武士達でした。

鎌倉幕府の滅亡と南北朝の動乱期や、そこから続くみやこの騒乱と戦国時代。まさに室町時代は戦いに明け暮れた時代なのです。いくさが広範囲に広がるにつれ、動員人数も増え、戦闘の方法も個人戦から集団戦に変わりはじめます。それまで戦の主役であった上級の武士である騎馬武者、さらには補助人員であった郎党や所従だけでは人手が足りなくなってきました。そこで、臨時雇いの戦闘員

写真2　【重要文化財】《真如堂縁起》下巻部分　真正極楽寺蔵



が導入されるようになります。後に足軽と呼ばれるこのような戦闘員は、その名のとおり馬には乗れず、もっぱら徒歩で移動します。鎌倉時代までの主要な甲冑である「大鎧」は騎乗して弓を射ることを想定して造られていたため、徒歩の足軽達にとっては大きく重く、また高価なので適切な装備とは言えませんでした。その結果、より軽く簡単で、動きやすい甲冑が求められました。この需要を満たすため、主に上級武士の従者たちが用いていた「腹当」という剣道の防具に似た甲冑から進化した「腹巻」と、大鎧を簡略化した「胴丸」が室町時代を代表する武士の装いとなりました**[写真1]**。両者とも、徒歩で移動しやすいように、胴の下に垂らされた草摺と呼ばれる部分のスリットが増え、下半身を大きく動かすのに適した形状になっています。十六世紀前半に描かれた重要文化財「真如堂縁起」（真正極楽寺蔵）**[写真2]**の下巻では、馬に乗る上級武士と、徒歩で戦う下級武士の甲冑がきちんと描き分けられ、登場人物の身分が一目でわかるように工夫されています。

このように、もともとは下級武士が用いていた手軽な甲冑だった腹巻と胴丸ですが、その使いやすさから次第に上級武士も着用するようになり、それに合わせて袖や兜が追加され、縅糸の色合いも多様化していきました。今に残る室町時代の甲冑はこういった上級武士用のものがほとんどです。

現在の装い

さて、室町時代の甲冑とは時代も国も違うのに、同じような変化を生んだ装いが現在にあります。それはスーツのジャケットの裾に入れられた「ベント（Vent）」と呼ばれるスリットです**[図1]**。スーツも本来はイギリスの貴族が着用したモーニングコートという乗馬用の服でした。そのため、馬上で裾を左右に振り分けるためにジャケットに切れ込みを入れたのがベントの始まりです。最初は裾の中心に一本だけのセンターベントだったものが、より活動しやすいように左右二本のサイドベンツへと変化しました。まるで甲冑の草摺のように必要に応じて分割されたこのベント、日本に洋装が導入された当初は軍人が剣を装着するのに都合良かったため「剣吊り」とも呼ばれたそうです。国や時代は違っても、戦う男の装いには共通した目的があるのですね。

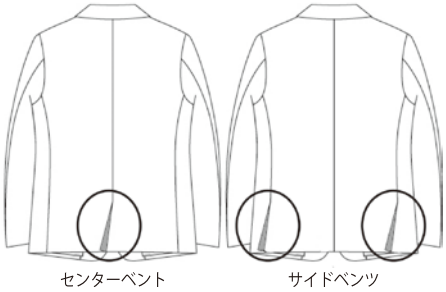


図1　ジャケット

（学芸部　末兼俊彦）

印刷・富士印刷社